1版

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科研費 KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２１ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｈ００６６２

研究課題名（和文）中国語における文法的意味の史的変遷とその要因についての総合的研究

研究課題名（英文）A comprehensive study of the historical evolution of grammatical meaning in Chinese and its factors

研究代表者

大西　克也（Onishi, Katsuya）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授

研究者番号：１０２７２４５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　12,800,000円

研究成果の概要（和文）：先行プロジェクトに引き続き、中国語における指示詞、代名詞、類別詞、疑問詞、否定詞、空間、時間、使役、受動等各種文法形式と文法範疇を広く取り上げ、歴史的変化の背後に存在する様々な要因を解明した。個別の文法形式や文法範疇の歴史的変遷に対して、無標表現が担う概念表現と有標表現が担う実体表現の対立軸が果たした役割を、具体例を通じてより鮮明に見通せたことは、中国語文法史研究の今後の展開の上での重要な成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
二千数百年を超える時空間に展開された中国語文法史には、人類の言語の歴史の解明に資する無尽蔵とも言える課題が、未解明のままで取り残されている。我々のプロジェクトが解明した成果はその一部分に過ぎないが、時空間を俯瞰する立場からより一般性の高い原理の解明を目指した我々の成果と方法論とは、中国語文法史や歴史言語学における課題の発掘や解明に向けての一つの指標となると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Continuing on from our previous project, we have extensively discussed various grammatical forms and categories in Chinese, such as demonstratives, pronouns, classifiers, interrogatives, negatives, space, time, causative, passive, etc., and clarified the various factors behind historical changes. The fact that the role played by the axis of opposition between the conceptual representation of unmarked expressions and the substantive representation of marked expressions in the historical evolution of individual grammatical forms and grammatical categories can be seen more clearly through concrete examples is an important achievement in the future development of research into the history of Chinese grammar.

研究分野：人文学

キーワード：言語学　中国語　文法史　文法的意味　概念表現　実体表現

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

前世紀における現代中国語文法の理論的研究の飛躍的な進展を背景として、世紀の境目の頃から、その成果を中国語文法の歴史的研究へ還元する動きが始まった。この動きは、言語学一般における文法化理論の中国語への適用、認知文法における多義性、多機能性への関心、類型論における機能変化の類型性に対する関心の高まりとの相互作用のもと、2010 年代以降明らかに大きな流れとして定着した。

　このような流れと歩調を合わせ、我々は 2004 年度より科研費による中国語文法史に関する共同研究プロジェクトを立ち上げ、特に 2014 年度に開始した「概念表現と実体化表現から見た中国語文法史の展開－構文と文法範疇の相関的変遷の解明」（基盤研究(B)26284056）は、無標の概念表現と有標の実体表現の対立が、中国語文法において通時的・汎範疇的に存在したことを突きとめる画期的な成果を挙げた。

　本プロジェクトはその成果の上に立ち、個々の文法形式と文法範疇に関わる文法的意味の歴史的変遷の背後に存在する様々な要因を解明し、前プロジェクトの成果の高度化、一般化を目指すものとして構想された。

２．研究の目的

　本研究プロジェクトは、語彙化、構文化、範疇化、文法化等、言語における様々な形式化を一括して〈言語化〉と捉え、〈言語化〉のメカニズムとその変容を突き動かす原動力は何かを問うものである。二千年を優に超える中国語の歴史を題材として、各種構文や機能語などの言語形式が担った「文法的意味」の成立・変容の歴史を描き出すとともに、そのような変化を突き動かす要因について、多面的かつ総合的な探求を行うことを目的とし、またそのことを通じて歴史言語学における理論的深化と事例の蓄積に対する貢献を果たそうとするものである。

３．研究の方法

本研究プロジェクトでは、名詞、指示詞、疑問詞、数量構文などが関与する〈モノ〉の捉え方に関する「文法的意味」、動詞および様々な動詞構文、副詞、接辞などが関与する〈コト〉の捉え方に関する「文法的意味」を広く取り上げ、具体的な形としての文法形式が、それぞれが関与する「文法的意味」をどのように言語化していたのかを分析し、その形成と変容のプロセス及びその要因を、各時代を担当する研究者の協働の下で通時的に究明して行くこととした。

　代表者である大西は、全体の取りまとめの他、紀元前の上古中国語を担当、松江は紀元前後から隋唐時代にかけての中古中国語を担当、木津は宋代から清代にかけての近世中国語を担当、木村は現代中国語を担当するとともに、理論言語学、日中対照研究の立場から理論的な提言を行うという分業と協力体制のもとに研究を遂行した。分析対象に出土文献や方言も視野にいれた。研究協力者として参加した楊凱栄（呉方言、日中対照言語学）、小野秀樹（現代中国語文法）、飯田真紀（粤方言）、張佩茹（閩方言）も、それぞれの専門の立場から知見の提供を行なった。

４．研究成果

本研究では、中国語における指示詞、代名詞、類別詞、疑問詞、否定詞、空間、時間、使役、受動等各種文法形式と文法範疇を広く取り上げ、歴史的変化の背後に存在する様々な要因を解明した。ここではそれらのうち、主要な成果について概要を記述する。

(1)中国語における時間概念〈いま〉の捉え方

　現代中国語の「現在」、日本語の「いま」、英語の「now」がマークし得る出来事のタイプに差異が見られることから分かるように、発話時現在である〈いま〉を表す語が、出来事をどのように位置づけているのかは、言語によって一様ではない。ところが「現在」の語彙的意味があまりにも明瞭であるためか、出来事のタイプとの関わりについてはこれまでほとんど探究が行われてこなかった。

　本研究では、まず現代語の「現在」が変化の既実現や状況の出来をマークする文末助詞の「了」と親和性を持つ一方で、行為が完了し終結してしまう動詞接辞の「了」とは両立しにくい等の事実に基づき、「現在」はある状況が〈いま、ここ〉に現に存在することを表すための時間詞であることを明らかにした。さらにこれを踏まえ、「現在」に相当する上古語の「今」もまた、「現在」同様〈いま、ここ〉に現に存在する状況をマークするが、発話現場に存在する人々への影響性を持つ通常とは異なる出来事を「今」と捉える主観性が強いことを明らかにした。このような傾向

は隋唐時代にいたるまで継続することが確認されるいっぽう、「現在」は中古期のテキストから見られるが、現代語タイプの時間詞としての成立は、清朝後期まで降る可能性が高いことが示された。

本研究は〈いま〉という発話時現在を表す語と出来事との関係性をこれまでにない視点から通時的に分析したものであり、モダリティやアスペクト研究においても今後参照可能な有用な成果であると考えられる。

(2)時間詞の空間性
現代中国語における直示的(deictic)時間詞が、「目前」(いま)、「前天」(おととい)、「後天」(あさって）のように空間メタファーによって語彙化されていることは周知のとおりだが、そのメカニズムに関しては未解明であった。
本研究ではこの問題を取り上げ、現在および過去を指す時間詞が〈前〉を意味する空間語彙によって言語化され、未来を指す時間詞が〈後ろ〉を意味する空間語彙によって言語化される空間メタファーの成立は、現在と過去を「見える領域」、未来を「見えない領域」として捉える時間認知の対立に起因することを明らかにした。
このような「見える領域」と「見えない領域」とを対立的に捉える視点は、次項で述べる現代語における否定詞の対立の基盤ともなっており、実体的なモノ・コトと概念的なモノ・コトとを対立的に捉える中国語の根幹とも結びついている。本研究課題における重要な成果の一つである。

(3)否定詞
現代中国語ではほぼ「不」と「没（有）」に集約されているが、歴史的には複数の否定詞が併存していた時期が長い。その共時的な使い分けや歴史的変遷は中国語文法史における大きなテーマであり、研究も多い。

まず現代中国語の否定詞に関しては、現在と過去の出来事を否定する「没」に対し、未来の出来事や属性、意志は「不」で否定するという周知の使い分けが存在する。本研究では、このこのような使い分けが、過去の出来事を「実在する出来事」と捉え、「見える領域」として認識するのに対し、未来の出来事や属性等は主観的な思惟で捉え、「見えない領域」として認識する対立に起因することを明らかにした。すなわち両者の使い分けは、上記時間詞の捉え方と同一の対立が基盤となっていたのである。

ところが上古に目を向けると、「不」は「見える領域」としての過去の出来事も、「見えない領域」の出来事も否定することができる。この事実自体、先行研究ではほとんど注目されることがなく、上古語の「不」と「未」の対立を、現代語の「不」と「没」との対立とパラレルに捉える論調も少なくない。しかし属性否定にも用いられる「未」を「見える領域」の否定に位置付けることは不適切である。上記「不」「没」の住み分けは、本来事物の〈非存在〉を表す「没（有）」が、上古以来の「不」の管轄領域を浸食する形で形成されてきた可能性が高まった。今後さらなる検討が必要であるが、本成果は否定詞の史的研究に新たな視野を提供するとともに、概念表現と実体表現をどのように切り分けるかについても歴史的に一様ではない可能性を浮かび上がらせた点において、本研究課題の根幹に関わる成果と位置付けられる。

(4)三人称代名詞「他」の成立プロセス
上古期には専用の三人称代名詞が存在しなかった中国語において、現代語で使われる「他」が人称代名詞化したのは後漢から魏晋南北朝時代にかけてのこととされるが、その成立のプロセスについてはほとんど解明されていなかった。

本研究では、上古においては話者の念頭にあるターゲット（X）以外の不特定もしくは不定のものを漠然と指示していた「他」が、中古期において特にXが話し手自身（一人称）や聞き手（二人称)、またはその双方である場合に、自分（たち）（X）とは異質のものを排除する心的動機に基づき、Xと異なる属性をもつ特定の人物を排斥的に指示する用法を獲得し、これが定指示（三人称）の用法として定着するプロセスを描き出すことができた。このプロセスは、不特定と特定、不定と定といういわば相反する指示範疇を超えた文法化が、話し手や聞き手の主観に動機づけられて進行する特殊な実例を提示したものであり、文法範疇の成立・変容の歴史を描き出し、そのメカニズムの解明を目的とする本課題における大きな成果と位置付けられる。

(5)受動構文の位置づけ
中国語が対格言語に属することは、古今を通じて不変の類型論的な性質である。本研究では、とりわけ上古中国語において、対格言語として非常に強い動作主志向性を具えていたことを指摘するとともに、その具体的表れとして、高度に発達した使役構文に対して受動構文が極めて貧弱であり、特定の時空間に発生した出来事の描写には受動文が回避される傾向があることを明らかにした。上古において受動構文が選択されるのは、現実の動作主が存在しない未然の事態や、不特定の動作主が想定される一般的な出来事の描写であることが多い。このような性質に変化が見られるようになるのが前漢時代であり、このころから特定の出来事において被動作主を主語とするいわば典型的な受動文が増加していく。このことは、動作主志向の強い中国語において、力の弱い立場にある存在に対する表現者の視点の形成が始まることを意味する。このような観点から受動構文の位置づけを試みた指摘はこれまでにないものであり、中国語におけるヴォイ

スの歴史的研究に新たな視点を提供することが期待される。

(6)概念と実体――今後に向けて
　本研究課題においても有力な柱としたのが、前研究課題（上掲）で打ち出した概念表現と実体表現との対立である①。本研究においても、上で言及したものの他、非自立的な実詞を非実体的、概念的、虚的なものとして、実体を表す自立的な実詞と対立的に捉える視点が提示された。例えば非自立的な無標の区別詞や性質形容詞が担うのは事物の恒常的な属性描写であるのに対し、自立的で有標の状態形容詞は特定の時空間における実体的、具体的な様相を描写する。前者を解として求める疑問詞が非自立的な「什麼様」、後者を解として求める疑問詞が自立的な「怎麼様」である。
　上古中国語のモダリティの枠組みについても、概念表現／実体表現の対立軸からの再構築の提案も行われた。「矣」「也」などの文末助詞や法副詞を伴う有標のモダリティ表現をリアルな主観を表明する実体的モダリティに位置づけ、概念的、抽象的な無標表現（断定表現）と対立的に捉える視点である。これは無標表現と有標表現との対立が、現実（Realis）と非現実（Irrealis）との対立に必ずしも整合しない上古中国語の特性を踏まえたものである。
　無標表現が担う概念表現と有標表現が実体表現の対立軸を、具体例を通じて共時的にも通時的にも有効な概念としてより鮮明に見通せたことが、本研究における最も主要な成果である。長い歴史を持つ中国語文法体系の変遷の解明は容易ではない。残された個別の課題は無限にあると言っても過言ではないが、本研究は今後の検討に必要な基本的な視点を示し得たものと考えられる。

〈引用文献〉
①木村英樹、“ 指称 ”の機能― 概念、実体および有標化の観点から―、中国語学、261 、2014、64-83

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計37件（うち査読付論文　14件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　11件）

１．著者名 大西克也	４．巻 -
２．論文標題 上古漢語被動句及其中的世界観－－以動力表達為線索	５．発行年 2023年
３．雑誌名 継承伝統博古通今：慶祝郭錫良先生九十華誕学術文集	６．最初と最後の頁 175-188
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

１．著者名 木村英樹	４．巻 24
２．論文標題 “現在”の射程	５．発行年 2022年
３．雑誌名 現代中国語研究	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

１．著者名 木津祐子	４．巻 269
２．論文標題 「官話」再読	５．発行年 2022年
３．雑誌名 中国語学	６．最初と最後の頁 14-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

１．著者名 松江崇	４．巻 1
２．論文標題 試談敦煌變文中的兩類名量詞及其語義功能的差異	５．発行年 2021年
３．雑誌名 雲漢	６．最初と最後の頁 71-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

１．著者名 楊凱栄	４．巻 2
２．論文標題 疑問を表さない日本語の「疑問詞＋動詞基本形＋の」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 国際コミュニケーション研究（専修大学国際コミュニケーション学部紀要）	６．最初と最後の頁 58-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小野 秀樹	４．巻 29
２．論文標題 現代中国語の比較文における“ 要 ” の機能	５．発行年 2022年
３．雑誌名 言語・情報・テクスト	６．最初と最後の頁 11～28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002005962	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 飯田真紀	４．巻 100-2
２．論文標題 廣州話的話語標記“ 唔知ne1 ”的詞彙化現象	５．発行年 2022年
３．雑誌名 中國語文通訊	６．最初と最後の頁 149-169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.29499/CrCL.202207_101(2).0007	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大西克也	４．巻 なし
２．論文標題 上古漢語“ 有 ”字存在句及其時間性質	５．発行年 2021年
３．雑誌名 語苑探ze2－慶祝唐作藩教授九秩華誕文集	６．最初と最後の頁 481～494
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大西克也	４．巻 4
２．論文標題 也説清華簡从“䀠”之字	５．発行年 2021年
３．雑誌名 清華簡研究	６．最初と最後の頁 82～93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木津祐子	４．巻 No.2-1（岩田礼教授栄休紀念論文集）
２．論文標題 「把」字句から見る長崎唐通事資料	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『地理言語学研究』モノグラフ	６．最初と最後の頁 196～207
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5281/zenodo.6342364	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松江崇	４．巻 No.2-1(岩田礼教授栄休紀年論文集)
２．論文標題 揚雄『方言』所収の「北燕」「朝鮮」方言語彙の性質	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『地理言語学研究』モノグラフ	６．最初と最後の頁 134～150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5281/zenodo.6342364	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 飯田真紀	４．巻 第518号
２．論文標題 広東語の談話標識“唔知ne1”	５．発行年 2022年
３．雑誌名 人文学報（東京都立大学人文科学研究科人文学報編集委員会）	６．最初と最後の頁 107～125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大西克也	４．巻 なし
２．論文標題 漢字の誕生と変遷――甲骨から近年発見の中国先秦・漢代簡牘まで	５．発行年 2021年
３．雑誌名 東アジア文化講座第2巻　漢字を使った文化はどう広がっていたのか　東アジアの漢字漢文文化圏（金文京編）	６．最初と最後の頁 25～33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大西克也	４．巻 1
２．論文標題 説“雨”和“雪”－氣象詞語在上古漢語中的語法表現	５．発行年 2020年
３．雑誌名 中国古典學	６．最初と最後の頁 150-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木村英樹	４．巻 なし
２．論文標題 中国語時間詞の空間性	５．発行年 2021年
３．雑誌名 時間と言語（嶋田珠巳・鍛冶広真編）	６．最初と最後の頁 59～74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木津祐子	４．巻 78
２．論文標題 京都大学蔵王[竹均]校祁[宀雋]藻刻『説文解字繫伝』四十巻について	５．発行年 2020年
３．雑誌名 汲古	６．最初と最後の頁 6,21～27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木津祐子	４．巻 なし
２．論文標題 唐話による医学書『三折肱』における馮夢龍『醒世恆言』受容	５．発行年 2021年
３．雑誌名 内田慶市教授退職記念論文集：文化交渉と言語接触（沈国威・奥村佳代子編）	６．最初と最後の頁 113～127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木津祐子	４．巻 60
２．論文標題 京都大学文学研究科蔵王[竹均]校祁[宀雋]藻刻『説文解字繫伝』に記された王[竹均]識語・跋文、陳慶鏞跋文及び田潜附識について	５．発行年 2021年
３．雑誌名 京都大學文學部研究紀要	６．最初と最後の頁 1～23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 木津祐子	４．巻 なし
２．論文標題 長崎・琉球の通事	５．発行年 2021年
３．雑誌名 東アジア文化講座第2巻　漢字を使った文化はどう広がっていたのか　東アジアの漢字漢文文化圏（金文京編）	６．最初と最後の頁 375～385
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松江崇	４．巻 なし
２．論文標題 略談“動詞＋補語”型使成式的拡大機制－以早期漢訳仏典中“他動詞＋在/到”型使成式為例－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 仏教漢語研究的新進展（朱冠明・龍国富編）	６．最初と最後の頁 241～251
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松江崇	４．巻 なし
２．論文標題 古代中国語における漢字の表語現象の諸相	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本語文字論の挑戦 表記・文字・文献を考えるための17章（加藤重広・岡墻裕剛編）	６．最初と最後の頁 59～80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 楊凱栄	４．巻 第19巻第6期（?109期）
２．論文標題 論頻率副詞“常常/総是/老是”在語気功能上的差異	５．発行年 2020年
３．雑誌名 語言科学	６．最初と最後の頁 579～591
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.7509/j.linsci.202008.033670	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小野秀樹	４．巻 Vol.27
２．論文標題 現代中国語における形容詞の連用修飾機能	５．発行年 2020年
３．雑誌名 言語・情報・テクスト	６．最初と最後の頁 19～30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 飯田真紀	４．巻 第517号-12号
２．論文標題 広東語の”唔係(m4hai6)/?(mai6)…SFP"構文	５．発行年 2021年
３．雑誌名 人文学報（東京都立大学人文科学研究科人文学報編集委員会）	６．最初と最後の頁 145～162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大西克也	4．巻 なし
2．論文標題 《清華七・越公其事》「[土幼]塗溝塘」考	5．発行年 2019年
3．雑誌名 第三十屆中國文字學國際學術研討會論文集	6．最初と最後の頁 285～294
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 大西克也	4．巻 13
2．論文標題 論上古漢語代詞“之”和“其”的替代功能	5．発行年 2019年
3．雑誌名 歴史語言學研究	6．最初と最後の頁 269～283
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 大西 克也	4．巻 22
2．論文標題 「雅言」獻疑	5．発行年 2019年
3．雑誌名 東京大学中国語中国文学研究室紀要	6．最初と最後の頁 11～32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00079011	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1．著者名 大西克也、李無未	4．巻 22
2．論文標題 發現“東京大學在學證書”:解開中國語言學理論奠基者胡以魯之謎	5．発行年 2019年
3．雑誌名 東京大学中国語中国文学研究室紀要	6．最初と最後の頁 55～72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00079013	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 木津祐子	4．巻 37
2．論文標題 「箇」の個別化機能と定指“量名”構造	5．発行年 2019年
3．雑誌名 中国語学研究 開篇	6．最初と最後の頁 149～161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 木津祐子	4．巻 8
2．論文標題 唐通事の官話教本『三折肱』について	5．発行年 2020年
3．雑誌名 関西大学東西学術研究所研究叢書	6．最初と最後の頁 103～119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 楊凱栄	4．巻 第五輯再録
2．論文標題 表全称義句式的中日対比研究	5．発行年 2019年
3．雑誌名 《日語研究》論文精選	6．最初と最後の頁 327～344
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 楊凱栄	4．巻 なし
2．論文標題 漢語幾対頻率副詞的語義功能與情態	5．発行年 2019年
3．雑誌名 第7回海外中国語言學論壇会議論文集	6．最初と最後の頁 172～180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 飯田真紀	４．巻 516号（第12分冊）
２．論文標題 広東語の文末助詞aa1maa3の意味拡張	５．発行年 2020年
３．雑誌名 人文学報（首都大学東京人文科学研究科人文学報編集委員会編）	６．最初と最後の頁 19～42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大西克也	４．巻 第12輯
２．論文標題 説“見”——清濁音變構詞ling4解	５．発行年 2018年
３．雑誌名 歴史語言學研究	６．最初と最後の頁 4～26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松江　崇	４．巻 2019年春之巻（總第25巻）
２．論文標題 漢語疑問數詞“多少”的生成機制－兼談中古疑問數詞系統的複雜性	５．発行年 2019年
３．雑誌名 中国語言文學研究	６．最初と最後の頁 6～7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松江　崇	４．巻 2（使役の諸相）
２．論文標題 古代中国語における動補型結果構文の拡張メカニズム－「他動詞＋在」結果構文を例として－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 シナ＝チベット系諸言語の文法現象（池田巧編）	６．最初と最後の頁 205～217
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 張佩茹	4．巻 33
2．論文標題 現代漢語嘗試範疇的標記與形式	5．発行年 2019年
3．雑誌名 二松（大学院紀要）	6．最初と最後の頁 1～20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計53件（うち招待講演　34件／うち国際学会　25件）

1．発表者名 大西克也
2．発表標題 去声構詞在上古漢語語法体系中的地位
3．学会等名 海外名家講学計画・漢語史与出土文献研究（北京大学中文系）（Voov meetingによる遠隔会議）（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 大西克也
2．発表標題 語、文之間――從語言表達的角度看古文字的歴史発展
3．学会等名 海外名家講学計画・漢語史与出土文献研究（北京大学中文系）（Voov meetingによる遠隔会議）（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 木村英樹
2．発表標題 中国語「アスペクト」の空間性および実存性について
3．学会等名 移動・空間・時間研究会（立命館大学)（招待講演）
4．発表年 2022年

１．発表者名 松江崇
２．発表標題 談揚雄《方言》中東齊海岱方言詞彙的特徵
３．学会等名 ICSTLL-55（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 松江崇
２．発表標題 古漢語代詞功能變化的若干模式
３．学会等名 古漢語詞彙語法研究（北京大学中文系・系列講座）（Voov meetingによる遠隔会議）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 松江崇
２．発表標題 揚雄《方言》中東部、北部方言的若干問題
３．学会等名 古漢語詞彙語法研究（北京大学中文系・系列講座）（Voov meetingによる遠隔会議）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 松江崇
２．発表標題 淺談漢代北方方言的形成過程
３．学会等名 Workshop: Chinese Language and its surroundings（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名
松江崇

２．発表標題
漢語史における疑問詞節埋め込み構造の変遷

３．学会等名
第56回中国語文法研究会（オンライン）

４．発表年
2022年

１．発表者名
楊凱栄

２．発表標題
日本語はなぜ連体修飾を多用するのか－日中対照を通じて－

３．学会等名
第56回中日理論言語学研究会（招待講演）

４．発表年
2022年

１．発表者名
小野秀樹

２．発表標題
比較文における“要”の機能

３．学会等名
中国語文法研究会（オンライン）

４．発表年
2022年

１．発表者名
大西克也

２．発表標題
上古中国語のヴォイスをめぐって

３．学会等名
日本中国語学会第3回中国語学セミナー（オンライン）（招待講演）

４．発表年
2021年

１．発表者名 大西克也
２．発表標題 上古漢語「矣」的情態功能
３．学会等名 舊語新知：古代經典的語言新釋」學術工作坊（オンライン）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 木村英樹
２．発表標題 中国語における直示時点の空間把握
３．学会等名 第54回中日理論言語学研究会（オンライン）　（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 木村英樹
２．発表標題 右か左か、東か西か――日中比較表現論
３．学会等名 第24回 愛知大学孔子学院公開講演会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 木津祐子
２．発表標題 「官話」再考
３．学会等名 日本中国語学会第71回全国大会（オンライン）（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 松江崇
２．発表標題 漢訳仏典中両種功能詞在日本“訓読文”中的反映―浅談古漢語与古日語之間語言接触面貌之一斑
３．学会等名 第十四届漢文仏典語言学国際学術研討会（Zoomオンライン会議）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 松江崇
２．発表標題 浅談第三人称代詞“他”的生成機制
３．学会等名 第十二届中古漢語国際学術研討会（VooVオンライン参加）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 松江崇
２．発表標題 漢語史における反方向性並列型複合動詞の形態素配列について
３．学会等名 ミニ・シンポジウム「漢語史研究における語彙論と音韻論」
４．発表年 2022年

１．発表者名 楊凱栄
２．発表標題 已然事態における未然形式の意味機能― 日中対照を通じて―
３．学会等名 第52回中日理論言語学研究会（オンライン）（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 楊凱栄	
２．発表標題 事態のとらえ方にみる言語表現の相違－中日対照を通じて―	
３．学会等名 第3回中国語学セミナー（日本中国語学会主催）（オンライン）（招待講演）	
４．発表年 2021年	

１．発表者名 張佩茹	
２．発表標題 台湾華語―「おはよう」は“早上好”にあらず―	
３．学会等名 立命館孔子学院 第166回中国理解講座（招待講演）	
４．発表年 2021年	

１．発表者名 飯田真紀	
２．発表標題 廣州話的疑問句句末助詞“ne1” ―以“唔知ne1”的習語化現象為主	
３．学会等名 第七屆方言語法博學論壇（オンライン）（国際学会）	
４．発表年 2021年	

１．発表者名 飯田真紀	
２．発表標題 広東語の談話標識“唔知ne1 M4zi1ne1”と日本語の応答表現「さあ(ね)」	
３．学会等名 多層言語環境研究国際シンポジウム「言語的変容の過去・現在・未来」(オンライン)(国際学会)	
４．発表年 2022年	

１．発表者名
大西克也

２．発表標題
上古漢語“矣”非體標記説

３．学会等名
第十屆国際古漢語語法研討会（オンライン）（招待講演）（国際学会）

４．発表年
2021年

１．発表者名
木村英樹

２．発表標題
「時間」という「空間」

３．学会等名
中国語文法研究会（オンライン）（招待講演）

４．発表年
2021年

１．発表者名
飯田真紀

２．発表標題
中国語と日本語の＜ジャナイカ＞

３．学会等名
多層言語環境研究国際シンポジウム「多様性と言語」

４．発表年
2021年

１．発表者名
張佩茹

２．発表標題
言語の規範性と多様性─台湾華語教材の執筆を通じて考えたこと─

３．学会等名
第48回中国語文法研究会（オンライン）

４．発表年
2021年

１．発表者名 大西克也
２．発表標題 試論上古漢語被動句及其世界観―以動力表達為線索
３．学会等名 The 27th Annual Conference of the International Association of Chinese Linguistics（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 大西克也
２．発表標題 “弗”為“不之”合音説之我見
３．学会等名 第八屆出土文献青年学者国際論壇（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 木村英樹
２．発表標題 林黛玉、なぜ笑う――　中国清代小説における“笑”の機能――
３．学会等名 日本笑い学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 木村英樹
２．発表標題 現代漢語文法の史的特質――現代語文法と歴史文法の接点を探る―
３．学会等名 日本中国語学会第１回中国語学セミナー（招待講演）
４．発表年 2019年

1．発表者名 木村英樹
2．発表標題 中国語における「時」の空間性
3．学会等名 第4回時間言語フォーラム「時間・空間・ダイクシス」（招待講演）
4．発表年 2019年

1．発表者名 木津祐子
2．発表標題 琉球久米村通事が学んだ官話ーー通事が用いた教材の写本間差異をてがかりに
3．学会等名 日本中国語学会第１回中国語学セミナー（招待講演）
4．発表年 2019年

1．発表者名 松江崇
2．発表標題 從話語分析視角看《論語》《孟子》中疑問語氣助詞　「乎」「與」的功能差異
3．学会等名 「漢語語法化的通與變國際學術研討會」[既+旦]「第十一屆海峽兩岸漢語語法史研討會」（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 松江崇
2．発表標題 三世紀江南方言の上中古間文法史上の位置づけ
3．学会等名 シンポジウム「漢語史研究における動態的観点と静態的観点」
4．発表年 2019年

１．発表者名 楊凱栄
２．発表標題 日中両言語における事態の捉え方の違い
３．学会等名 国際シンポジウム「日中対照と中国語教育」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 楊凱栄
２．発表標題 漢語幾対頻率副詞的語義功能與情態
３．学会等名 第７屆海外中国語言學者論壇（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小野秀樹
２．発表標題 中国語における呼称・敬称の選択と呼びかけ行為の実態
３．学会等名 第150回中国理解講座（立命館孔子学院）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小野秀樹
２．発表標題 現代中国語における連用修飾語の文法的意味
３．学会等名 「概念表現と実体化表現から見た中国語文法史の展開―構文と文法範疇の相関的変遷の解明」研究例会
４．発表年 2020年

1．発表者名 飯田真紀
2．発表標題 広東語文末助詞“添”(tim1)の発話行為用法の獲得
3．学会等名 国際シンポジウム2019「アジア多層言語社会と複言語主義」（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Maki Iida
2．発表標題 Cantonese as a Foreign Language in Japan: Current Situation and Problems
3．学会等名 International Symposium on Teaching Cantonese as a Second Language（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 大西克也
2．発表標題 也説清華簡从“黽”之字
3．学会等名 紀念清華簡入藏暨清華大學出土文獻研究與保護中心成立十周年國際學術研討會（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 木村英樹
2．発表標題 中国語のヴォイス——サセル、ナラセル、ナラサレル——
3．学会等名 日本言語学会　80周年記念シンポジウム（招待講演）
4．発表年 2018年

１．発表者名
木村英樹

２．発表標題
中国語における「概念」と「実体」の文法的対立

３．学会等名
日本エドワード・サピア協会第33回研究発表会（招待講演）

４．発表年
2018年

１．発表者名
木津祐子

２．発表標題
《朱子語類》《祖堂集》中的抉択義疑問代詞－兼談“箇"的実体化功能－

３．学会等名
“中国與世界”学術研討会（国際学会）

４．発表年
2018年

１．発表者名
松江崇

２．発表標題
抉擇義疑問代詞“口+那”的來源及其功能擴展機制

３．学会等名
韓國中文學會國際學術論壇－中國古文獻和語言研究的新潮流（国際学会）

４．発表年
2018年

１．発表者名
楊凱栄

２．発表標題
从表達功能看対日華語教学

３．学会等名
《開創華語文教育与僑民教育之新視野》国際学術研討会（招待講演）（国際学会）

４．発表年
2018年

１．発表者名
楊凱栄

２．発表標題
論信息来源詞碼化的漢日差異及其動因

３．学会等名
台湾国立清華大学語言研究所学術研討会（招待講演）

４．発表年
2018年

１．発表者名
楊凱栄

２．発表標題
全称義句式的漢日対比

３．学会等名
漢日対比語言学系列講座（清華大学（北京））（招待講演）

４．発表年
2018年

１．発表者名
楊凱栄

２．発表標題
漢日対比的方法与思路

３．学会等名
中国北方工業大学文学院学術論壇（招待講演）

４．発表年
2018年

１．発表者名
飯田真紀

２．発表標題
從語法化角度看粵語的句末助詞體系

３．学会等名
多層言語環境における態度・行動・相互行為（国際学会）

４．発表年
2018年

１．発表者名 飯田真紀
２．発表標題 粤語句末助詞aa1maa3的語義変化
３．学会等名 第二十三届国際粤方言研討会（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 飯田真紀
２．発表標題 粤語句末助詞的高度語法化現象
３．学会等名 香港科技大學人文學部Seminar（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計12件

１．著者名 松江崇	４．発行年 2023年
２．出版社 京都大学学術情報リポジトリ紅（博士学位論文）	５．総ページ数 420
３．書名 古漢語における疑問目的語の語順変化メカニズム	

１．著者名 楊凱栄	４．発行年 2021年
２．出版社 白帝社	５．総ページ数 96
３．書名 『身につく中国語』改訂新版	

１．著者名 楊凱栄	４．発行年 2021年
２．出版社 朝日出版社	５．総ページ数 96
３．書名 スリム版『中国語で伝えようコミュニケーション・チャイニーズ』	

１．著者名 張佩茹	４．発行年 2021年
２．出版社 白水社	５．総ページ数 162
３．書名 もっと知りたい台湾華語 ： 台湾の標準語	

１．著者名 木村英樹・中川正之・杉村博文	４．発行年 2020年
２．出版社 立命館孔子学院	５．総ページ数 178
３．書名 「初級中国語文法」とその後の中国語文法	

１．著者名 小野秀樹・賈黎黎・吉川雅之・小嶋美由紀・李佳[木梁]	４．発行年 2020年
２．出版社 白帝社	５．総ページ数 169
３．書名 漢語課本	

1．著者名	4．発行年
飯田真紀	2019年
2．出版社	5．総ページ数
白水社	160
3．書名	
ニューエクスプレスプラス広東語	

1．著者名	4．発行年
木村英樹	2018年
2．出版社	5．総ページ数
商務印書館	313
3．書名	
漢語語法的語義和形式	

1．著者名	4．発行年
宮本徹・松江崇	2019年
2．出版社	5．総ページ数
放送大学教育振興会	274
3．書名	
漢文の読み方－原典読解の基礎－	

1．著者名	4．発行年
楊凱栄	2018年
2．出版社	5．総ページ数
白帝社	362
3．書名	
中国語学・日中対照論考	

1．著者名 小野秀樹	4．発行年 2018年
2．出版社 集英社	5．総ページ数 254
3．書名 中国人のこころ　「ことば」からみる思考と感覚	

1．著者名 飯田真紀	4．発行年 2019年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 308
3．書名 広東語文末助詞の言語横断的研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	木村　英樹 (Kimura Hideki) (20153207)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・名誉教授 (12601)	
研究分担者	木津　祐子 (Kizu Yuko) (90242990)	京都大学・文学研究科・教授 (14301)	
研究分担者	松江　崇 (Matsue Takashi) (90344530)	京都大学・人間・環境学研究科・教授 (14301)	

6．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	楊　凱栄 (Yang Kairong)		
研究協力者	小野　秀樹 (Ono Hideki)		
研究協力者	飯田　真紀 (Iida Maki)		
研究協力者	張　佩茹 (Chang Peiju)		

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関